

題材【CASE3…底なし沼】

なぜ、こんなことになったのか。
気づいたときには、腰から下は、沼の中だった。
手の届く場所にある草木をつかんでも、
俺の体重を支えることはできず、
ブチブチと根元から抜けるだけ。
もがくほどに、泥が体を包み込んでゆく。
シヨベルカーでもない限り、
この窮地から逃れるすべはないだろう。
俺は、どうやら助かりそうにないようだ。
とうとう、泥は肩の高さにまで達した。

【応募作品】

このままでは、全身が沼に飲み込まれてしまう……。
と思ったそのとき、足の裏に固いものを感じた。
足が沼の底についたのだ。
「えっ、このままじゃ沈まないし、死ねないんだけど……」
男は、日照り続きで作物が穫れなくなった村を救うため、
人柱として、竜神に捧げられた身だった。
男は、村人たちに涙で見送られ、村を救うと約束していた。
底なし沼に底があったなんて言い出せる訳がない。
夜が更けてから、男はひっそりと沼を抜け出し、
村から遠い土地まで逃げた。
その後、人柱などは関係なく雨が降り、村は救われた。
村人たちは、村を救った英雄として、
底なし沼（底あり）に沈んだ男を末代まで称えた。